古田史学の会・東海

東 海 の 古 代

第１０８号　平成２１(2009)年８月

会　　長：竹内　強
編集発行：事務局　〒489-0983　瀬戸市苗場町137-10
林　伸禧〈Tel&Fax：0561-82-2140、ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

古賀達也氏の講演で述べられた見解について、ご意見がありましたので掲載します。

「始」と「初」

名古屋市　竹口健三

先日（２００９年６月２８日)、古賀達也氏のの講演がありました。

古賀達也氏は、

『無量寺文書に見る九州年号』(今井久氏著)には白雉年号が記載された記事がある。これと同じ記事が『日本書紀』には２回同じ記事がみえる。

といわれました。

・聖帝山実報寺縁起前之次

聖帝山二代ノ時人皇三十七代孝徳天皇ノ御宇白雉二年始メテ一丈六尺ノ繍像ヲ作リ其外千佛ヲ刻ム、云々。中略

・聖帝山実報寺(旧名大明寺)。旧東予市実報寺

六四〇年、三十四代舒明天皇十二年、勅願により建立。開山恵隠法師、六五一年、(白雉二年)二世意照、丈六尊像を彫り、千体小像を安置。

この記事が、『日本書紀』に同じ記事として出てくるのは、無量寺文書の記事をみて二度にわたって転用したのではないかとの主旨を話されました。

その中での「始（はじめて)」の意味について、長谷川鉦治氏の指摘で、古賀達也氏の意見に疑問を感じましたので、『漢語新辞典』(大修館発行)で調べたところ

使いわけ　はじめ・はじめる「始・初」

「始」:継続する事柄の出発点。第１回、「仕事始め」

「初」:ある期間の時間の最初の部分。「咲き初め、年の初め」

なお、動詞「はじめる・はじまる」は「**始**」、副詞「はじめて」は「**初**」を用いる。　(303頁)

と記載されていました。

「はじめる」は、そのあとに終わる旨の文言があるのではないかと思ったところ、次のとおりありました。

◎『日本書紀』巻第二十五

孝徳天皇白雉元年、元年十月條

是月、始造二丈六繍像・侠侍・八部等卅六像一。

（是の月に、始めて丈六の繍像・侠侍・八部等の三十六像を造る。）

是歳、漢山口直大口、奉レ詔刻二千佛像一

（是歳、漢山口直大口、詔を奉りて千佛の像を刻る。）

二年春三月甲午朔丁未、丈六繍像等成。

（二年春三月の甲午の朔丁未に、丈六の繍像等成りぬ。）

（岩波文庫『日本書紀』四　原文4522･523頁、読下文316頁、訓読：大野晋）

◎『日本書紀』巻第二十二、
推古天皇十三年四月・十四年四月條

十三年夏四月辛酉朔、‥‥‥、以始造=銅繍丈六佛像、各一躯–。

（十三年の夏四月の辛酉の朔に、‥‥‥、始めて銅・繍の丈六の佛像、各一躯を造る。……）

十四年夏四月乙酉朔壬辰、銅繍丈六佛像並造竟。

（十四年の夏四月の乙酉の朔壬辰に、銅・繍の丈六の佛像、並に造りまつり竟りぬ。）

（岩波文庫『日本書紀』四　原文461頁、読下文106頁、訓読：大野晋）

『日本書紀』を編集した人物が「始」と「初」の意味を取り違えたとも、二度も同じ記事を使ったとも思えません。

そこで大野晋氏が著述された原文の読み下し文に、少なからず疑問を差し挟む事となりました。

原文を見ると、すべて「始造」とあり、「始と造」の間に「レ点」を入れてみると、素直に「造り始める」と、読めるのではないかと思います。

「始造」は『日本書紀』に二度出てきても何も問題はない事となり、読み下し文では「始めて‥・造る」となっているが、本来は「造り始める」と読むべきではないでしょうか。
如何なものでしょうか。

「始めて」について

名古屋市　石田敬一

平成２１年６月２８日（日）に名古屋市市政資料館で行われた古田史学の会事務局長の古賀達也氏が行った講演の内容は、素晴らしいものでした。

従来の九州年号についての考え方は、丸山モデルを始め、「大宝」以降には九州年号が無いという前提で、年号の当てはめが行われてきました。しかし、フィロロギーの方法で考えると、様々な文書で出現する年号「大長」は実在したと考えられます。このことから「大長」を削除したり、「朱鳥」をカットして７０１年以前に「大長」を押し込めるのではなく、九州年号の「大長」は大和年号の「大宝」と並行して７０１年以降も「大化」に続いていたと考えるのが自然な思考ではないかというのが古賀氏の考えであり、７０１年以降は九州年号と大和年号がしばらく並行していたとする仮説です。

たしかに７０１年以降は「大宝」年号があり、ここから年号が切り替わったという認識が強すぎて、まさか並行して年号が存在するという発想は私にはありませんでした。素晴らしい発想であり、古賀氏の仮説は十分説得力を持っていると思います。

この古賀氏の講演においては数多くの質問・提案がありました。その中の一つに「始めて」の意味について、春日井市の長谷川さんから質問・提案がありました。それは「始めて」には、「歴史上初めて行った」という意味と、「この時点から行為を開始した」という意味合いがあり、『日本書紀』の中に出現する「始めて」は、ほとんどが「始めて行った」の意味ですが、「この時から行為を開始した」という読み取り方であっても、ほとんどが文脈上理解できるとする意見です。

この長谷川さんの主張は、以前の当会の例会の中でも、問題提議されていました。

私は、その時そんな読み方も出来るなというくらいの軽い考えで、特に注視していませんでしたが、今回あらためて古賀氏の講演の中で、この問題が取り上げられ、私も一考しようと思い筆を取りました。

推古天皇十二年條に記述された「始めて」は、「この時からある行為を開始した」という読み取り方もできるので、「始めて」が２回出現してもおかしくないのではないかという長谷川さんの指摘に対して、古賀氏の返答を要約すると次のとおりでした。

「始めて」についてはファーストタイムかスタートかを文脈で判断するしかない。指摘された資料ＮＯ５の上段の線引き部分『大安寺伽藍縁起』の記述については、「庚戌年の十月に始めて、・・・・そして辛亥年の三月に終わる」とするので、文脈上、「開始した」という意味で間違いない。冬１０月から始めて春

３月に作り終わったということから「開始した」というスタートの意味だと判断できる。

一方『日本書紀』の「始めて」の多くはファーストタイムの用例であり、文脈上「始めて丈六の繍仏を造った」の「始めて」についてはファーストタイムの用例として考える。

資料ＮＯ．５上段の線引き部分

合繍佛像参帳

一　帳像具脇侍菩薩八部等卅六像

右袁智　天皇坐難波宮而、庚戌年冬十月始辛亥年春三月造畢即請者、

（『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』）

そこで私は以下に問題となっている文章について、具体的に検討します。問題の箇所を抜き書きすると次のとおりです。

是の月に、始めて黄書畫師・山背畫師を定む。

十三年の夏四月の辛酉の朔に、天皇、皇太子・大臣及び諸王・諸臣に詔して、共に同じく誓願ふことを發てて、始めて銅・繍の丈六の佛像、各一軀を造る。及ち鞍作鳥に命せて、佛造りまつる工とす。是の時に、高麗國の大興王、日本國の天皇、佛像を造りたまふと聞きて、黄金三百両を貢上る。

閏七月の己未の朔に、皇太子、諸王・諸臣に命せて、褶着しむ。

冬十月に、皇太子、斑鳩宮に居す。

十四年の夏四月の乙酉の朔壬辰に、銅・縫の丈六の佛像、並に造りまつり竟りぬ。

是の日に、丈六の銅の像を元興寺の金堂に坐せしむ。時に佛像、金堂の戸より高くして、堂に納れまつることを得ず。

（『日本書紀』推古天皇十二年四月～十四年五月）

さて、ここで問題とするのは二つめに出てくる「始めて」の解釈です。推古天皇十三年四月に「始めて」丈六の佛像を造るとしています。古賀達也氏はこの「始めて」は文脈上ファーストタイムの意味であるとしています。それは、一つには、その前に出てくる「始めて」が、明らかに黄書畫師・山背畫師を初めて定めた意味にとれます。なぜなら、もし、この「始めて」を行為のスタートの意味である始まりと捉えると、黄書畫師・山背畫師を定めるという行為そのものが始まったわけですから、その定める行為が終わることが対になっていなくてはなりません。ところがここでは終わりが書かれていません。有りません。スタートがあるもののエンドがないのです。スタートと解釈するとエンドがないことはおかしなことになります。

もともと定めるという行為を始めますよというように解釈するのは、不自然なことであると思います。

従ってこの「始めて」は行為のスタートの意味ではなく、歴史上初めての出来事であるファーストタイムの意味と解釈するのが適切ではないかと思われます。

この黄書畫師・山背畫師に関する「始めて」はこの時初めてその職が定められ、それは佛像に関係する職人のことです。これを考慮して、次に出てくる「始めて」丈六の佛像を造ることについては、黄書畫師・山背畫師と関連するものと捉え、丈六の佛像がこのとき初めて造られたと古賀氏は考えたと思われます。また、この『日本書紀』のテキストの著者についても古賀氏と同様の考えであるので、ファーストタイムの意味として読み下したと思います。

ところが、この文をしばらく先に読み進めると、十四年の夏四月の乙酉の朔壬辰條に、

銅・繍の丈六の佛像、並に造りまつり竟りぬ。

と出てきます。

ここでいう「造りまつり竟りぬ。」は「竟」が「おわる。事がすむ。おえる」ですから、つまり造り終わったということです。十三年の夏四月に作り始めて、十四年の夏四月に造り終わったと解釈できるのです。丈六という大きな仏像ですので、１年かかって作ったと解釈できます。

となれば、ここの「始めて」はファーストタイムではなくスタートの意味と捉えるのが妥当ではないでしょうか。

この文章はスタートの意味として理解したほうが私は良いと思います。

となると、次に問題となるのが、古賀氏は、ファーストタイムの意味として捉えたので、丈六の佛像の造成が推古天皇十三年（６０５年）と、孝徳天皇の白雉元年十月（６５０年）の「始めて丈六の縫像・侠侍・八部等の三十六像を造

る。」との記事の両方の内容が重複し、「初めて」が２回はありえないので、どちらかの記述が誤っているとしたことがどうか問題になります。

少なくとも推古天皇十三年條の佛像に関する「始めて」は、ファーストタイムではなく、スタートの意味ですから、重複しても問題ないと私は思います。

次に、孝徳天皇の白雉元年十月條の記述における「始めて」についても検討します。

関係する部分を拾います。

（白雉元年の）是の月(十月)に、始めて丈六の繍像・侠侍・八部等の三十六像を造る。

是歳、漢山口直大口、詔を奉りて千佛の像を刻る。倭漢直縣・白髪部連鐙・難波吉士胡床を、安藝國に遣して、百済舶二隻造らしめたまふ。

二年の春三月の甲午の朔丁未に、丈六の繍像等成りぬ。戊申に、皇祖母尊、十師等を請せて設齋す。

この記述についても、「始めて」と対になって「成りぬ」があります。「成りぬ」はつまり「でき上がる。仕上がる」ことですから、白雉元年の十月に丈六の繍像を造り始め、白雉二年の三月に丈六の繍像が出来上がったということに解釈できます。すなわち、この「始めて」はスタートの意味であると思います。

以上のことから、推古天皇十三年（６０５年）と、孝徳天皇の白雉元年十月（６５０年）の「始めて」は、ともにスタートの意味であると私は結論づけます。

従って、『日本書紀』は「始めて丈六の繍仏を造った」ことを２回書いており、『日本書紀』には間違いがある。嘘がある。とされる古賀氏の主張は当を得ていないと思います。推古天皇と孝徳天皇の「始めて」の重複が古賀氏の仮説の裏付けの一つではありますが、これを根拠とするのは適当でないでしょう。

だからといって、直ちに古賀氏の仮説が揺らぐと言うことでもありません。

古賀氏は「始めて丈六の繍仏を造った」ことを２回書いた『日本書紀』には間違いがあるので、『聖帝山実報寺縁起』の記述がが正しいとされました。しかし「始めて」に関する『日本書紀』の記述には間違いがあることを主張することに固執する必要はないと思います。

孝徳天皇の白雉元年（６５０年）の記述と時期を同じくする『聖帝山実報寺縁起』にも『大安寺伽藍縁起』資財帳にも同じ繍像の記述があります。そして、大和朝廷には存在しない袁智（越智）天皇が造ったと記述されています。これだけでも十分であると思います。

聖帝山二代ノ時人皇三十七代孝徳天皇ノ御宇白雉二年始メテ一丈六尺ノ繍佛ヲ作リ其外千佛ヲ刻ム、云々。　（『聖帝山実報寺縁起』）

合繍佛像参帳

一　帳像具脇侍菩薩八部等卅六像

右袁智　天皇坐難波宮而、庚戌年冬十月始辛亥年春三月造畢即請者

（『大安寺伽藍縁起』資財帳）

袁智（越智）天皇は大和朝廷には存在しません。大和王朝の年号ではない年号とともに大和王朝に存在しない天皇を記す資料の存在は十分に古賀氏の仮説を裏付けるものと思います。

飛騨と両面宿儺(1)

阿久比町　　竹内　強

はじめに

飛騨の歴史、特に古代についてはこれまでの研究では明らかにされていないことが沢山あります。これまでの考古学的研究成果を踏まえ旧石器時代から八世紀の初めまでの飛騨の歩みを体系的に明らかにし、その中で『日本書紀』に現れる両面宿儺についてその実態が少しでも明らかになればと思います。

飛騨が大和朝廷（近畿王朝）の支配下となったのはいつごろからであろうか。多くの研究者は両面宿儺の時代、『書紀』の表す仁徳紀にその支配下に入ったとしている。

三重大学の八賀名誉教授は、５世紀頃飛騨では建築・土木に優れた技術を持つ集団がいてこ

れらの集団の王が両面宿儺で大和朝廷に立ち向かう勢力として存在したが、大和朝廷に滅ぼされその支配の中に入ったという。

又、郷土史家の廣田照夫氏は高山市の冬頭王塚古墳の埋葬者が老若二人の男性であることから、応神天皇の第一子は額田大中彦と、老人は尾張連尻調命ではないか。両面宿儺の正体は応神天皇の第一子額田大中彦と第三子去来真雅皇子の二人であるとした。大和での権力闘争に敗れた二人の皇子が去来真雅皇子の所領地である飛騨に逃れたが、仁徳の命により武振熊に討たれたというのである。とすると仁徳紀以前に飛騨は既に近畿王朝の支配下にあったこととなる。

しかし、これらの論はすべて『書紀』の記述を認めたうえでの論理である。果たしてこの記述を信じていいのであろうか、私は５世紀以前に近畿王朝が飛騨の地をその支配の下に収めていたとは思えないのである。

飛騨の国に行くには、現在は名古屋から東海北陸自動車道で二時間少しで高山まで行ける。また、鉄道ではＪＲ高山本線で２時間半ほどで行ける。

それでは古代ではどうであろうか、東山道の美濃国「方県」から北へ進路をとり武儀駅・加茂駅（美濃加茂市）・下留（下呂市森）・上留（下呂市萩原町上呂）・石浦・飛騨国府と到着する。しかし、このルートは「延喜式」９世紀の平安初期の記事である。『続日本紀』の和銅６年（７１３）７月７日條の記事に

美濃・信濃の二国の境界は、道が険阻で狭く、人々の往来に難渋していた。そこで吉蘇路を開き通じさせた。

とあり、更に和銅７年（７１４）閏２月１日條に

美濃守・従4位下の笠朝臣麻呂に、食封七十戸と田六町を賜い、少掾・正七位下の門部連御立と、大目・従八位上の山口忌寸兄人にそれぞれ階位を進め、匠・従六位上の伊福部君荒当に田二町を賜わった。吉蘇路を開通した功によってである。

これらの記事を信じるなら先に述べた飛騨路は、この時期かあるいは更にそれよりも時代が下るのではないかと思われる。それでは七世紀末まで飛騨に行くにはどのようなルートを通ったのだろうか。

かつて飛騨にゆくルートは南からだけではなかった。北から飛騨に入る道もよく知られている。通称、鰤（ぶり）海道と呼ばれる道である。越中富山で水揚げされた鰤は、船津口（現在の富山市大田口）から国道４１号線に沿って笹津の追分を越え、今度は神通川沿いに猪谷関所に入り、ここから越中西街道と越中東街道の二つに分かれるが共に高山に入るここまで約十日間の道のりである。鰤はここで越中鰤から名前を飛騨鰤と替え高山から江戸街道を歩苛と呼ばれる山歩きのプロの背に乗せられ飛騨一ノ宮水無神社を通り久々野へここから野麦峠を越え松本へと運ばれた。富山湾から松本まで２００キロ１７日間の行程である。もちろん此の鰤街道を鰤が運ばれ始めたのは江戸の中期あたりだと思われる。しかし、縄文土器や和田峠の黒曜石の分布状況から、あるい飛騨地方の古墳の横穴式石室の状況などから北陸地方からこの道を通って縄文の時代から様々な文化が運ばれたのではないかと思われる。この北からの道こそが飛騨への中心ルートではないのか。

そう考えたとき、両面宿儺を殺したとされる武振熊の討伐ルートに大いに疑問を感じるのである。伝承によれば南からのルートをたどった事になっている。更に八幡信仰とも結びついていることを考えればこれらの伝承が『書紀』の記事を後世おそらく鎌倉時代以降に膨らませた話と思われる。その中心的役割を果たしたのが、富田禮彦によって編纂された『斐太後風土記』(明治６年)によるところのようである。富田は国学者で宿儺が崇敬されることが許せなかったのだろう。だから、富田は『斐太後風土記』の中で、宿儺信仰を否定、『千光寺記』の著者玄海を次のように強く批判している。

いと畏くも高津宮天皇（仁徳天皇）と朝敵国賊の宿儺とに、釈迦が末代に指図せしことなどを作り出し、この賊を菩薩と称え、また雄仁という廷臣を作り（中略）名義をも国体をも、条理をもいささかわきまえぬ玄海が罪は、両面の宿儺に等しかるべし。」更に続く「世を救う観音がいかに化身なればとて、人民をみだりに掠略して仏意にかなうものかは。いといと粗忽なる忘作忘うべき事なり。則ち当山を開くというのは当昔、妖賊の巣穴なりという事か不審。

富田は、その国学的知識と立場で飛騨地方のさまざまな伝承や縁起などを集め皇国史観から

それらを物語風にアレンジしたようである。

こうしたことを考えたとき、『日本書紀』の記述とそれにそった伝承が近畿王朝の支配が確立以後に成立したもの、特に近世になってから作り出されたものであることは明らかである。

それでは、これと正反対の地元の伝承（『千光寺縁起』等）はどうして生まれたのか。後世わざわざ近畿朝廷に相反するような伝承や縁起を創ったりするだろうか。富田のような考えが主流の時代の中でも、現在も尚こうした話が語られるには、それなりの理由があるはずである。

それを明らかにすることが飛騨の古代を明らかにすることになるのではないか。

１、飛騨の縄文時代と下呂石

縄文時代の飛騨の人々の生活はどんなものであろうか。縄文人の生活について私たちの世代は、狩猟や木の実をなどをとって生活し、獲物を求めて転々と移動する生活を営み、定住生活をしないと学んだ。

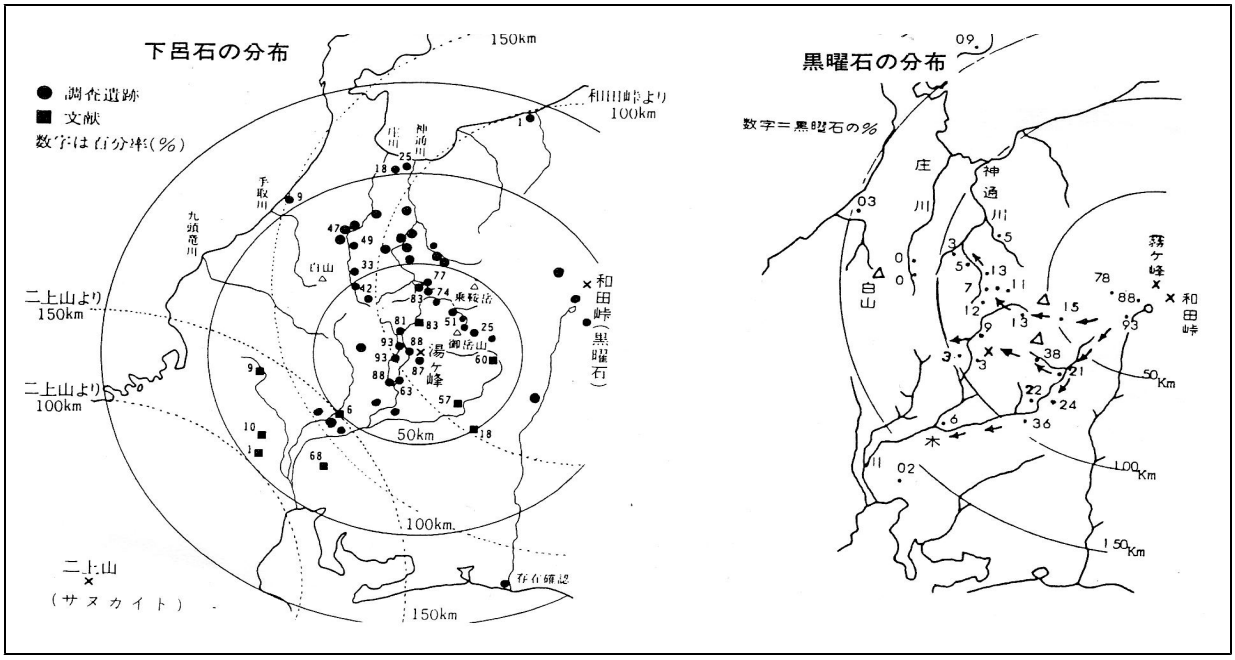
しかし、青森の三内丸山遺跡の発掘調査の結果などの分析によれば、これまでの常識とは違う縄文人の生活が見えてきた。イノシシやウサギを家畜のように育てていた、これらの動物のＤＮＡの鑑定によれば種族関係が明らかだと言われる。また、遺跡の周りにクリの林がありこれが人の手による植林であることも明らかになった。さらに、縄文時代は流通が行われ、そこにそれを専門とする商人まで介在し交換をしていたのではないかと言われている。黒曜石の移動状況は数百キロに及ぶ。そして、なによりも驚かさせるのは翡翠の発見状況である。新潟県の糸魚川流域で取れる翡翠は北は北海道、南は沖縄あたりまで運ばれている。三内丸山遺跡では、この翡翠の原石を加工する工房も発見されている。原石として運ばれた翡翠を青森で加工して北海道や内陸部に運んだようである。翡翠の加工はかなり高度な技術を必要とする。技術集団が移動したのかあるいは技術だけが移動したのかはまだよくわかっていない。

飛騨の縄文遺跡からは信州八ヶ岳の和田峠の黒曜石が多数発見されている。御岳、乗鞍槍ヶ岳と言う３，０００メートルを越える山々を越えて持ち込まれたのである。やはり、ここにもこれを運ぶ特別の集団がいたのだろうと思われる。

また、翡翠を使った大珠も発見されている。新潟糸魚川河口あたりから運ばれたと思われる。

こうしたものとは別に、もう少し加工しやすい下呂石が飛騨地方では広く分布するが、美濃地方にまでは広がりを見せていない。

日本海ルートから翡翠が運ばれ、信州からは黒曜石が運ばれているが、逆に飛騨からは美濃、尾張地方へ下呂石が大量に流出していないのである。太平洋に通じる飛騨川、木曽川ルートは縄文時代にはまだ機能していないのではないだろうか。



前回に引き続いて、林伸禧氏の「古代逸年号資料」を掲載します。

1　はじめに
2　古代逸年号の採集
3　古代逸年号採集の参考書物
4　古代逸年号資料
(1)　『群書類従』編

古代逸年号資料（2）

瀬戸市　　林　伸禧

4　古代逸年号資料

(2)　『全国神社名鑑』編

逸年号採集状況は、別表３－１（編纂順）・別表３－２（逸年号順）のとおりである。

逸年号の年数干支は全て掲載されていない。また、逸年号は、大日霊貴神社（秋田県）のみ「善記」を掲載しているが、それ以外は「大化・白雉・白鳳・朱鳥」だけである。そして、それ以外の逸年号が縁起等に掲載されている場合は、逸年号を削除して掲載されている場合がある。一例として、伊佐須美神社（福島県）の「由緒」に、

欽明天皇一三年高田南原に、同二一年に現在の宮地に鎮座したと伝えている。　（上巻、154頁）

と掲載されているが、『伊佐須美神社史』では

欽明天皇貴樂元年〔御宇十三年壬申也此時末建年号所傳ヲ當社古年代記記載此年号故随記之〕今大沼郡高田村伊佐須美神社創建矣

（70頁）

と掲載されている。

年数干支の有無の確認は、江戸時代の地誌、県・市町村史誌、郡史誌等で調査する必要がある。

なお、当該書物は、『神社名鑑』の改訂版であり、『神社名鑑』と比較した状況を別表３－１の「神社名鑑覧」に記載した。

『市民の古代』１１集の「『九州年号』目録」に次のような誤りがある。

・２３３頁、「八幡神社社伝（大分県大野郡緒方町）－孝徳天皇大化元年に社殿創立」

「八幡神社社伝」は、「大行事八幡神社社伝」が正しい。なお、大分県内には数社の「八幡神社」は存在するが、「孝徳天皇大化元年……」と登載されている神社は存在しない。

ひ　ろ　ば

第21回愛知サマーセミナーに参加しました

阿久比町　　竹内　強

７月１８～２０日の三日間で千数百の講座がもたれるまさにマンモスセミナーです。その数がすごいのとそれにも増してバライティー豊かな内容となっていました。今年は私の母校である同朋大学を中心に開催されたこともあり、３５年ぶりに大学に足を入れました。本会の会員の土井さんも「暦を科学する」と題する講座を持っていましたが、残念ながら私はそれには参加できませんでした。

私が参加した講座は、「父が語った７３１部隊と帝銀事件の闇」神谷則明（名古屋国際高校教諭）です。神谷君とは大学時代の親友で、今も年に一度は仲間で集まり旅行などしていますが、彼が戦争の悲惨さと平和について熱く語る姿に感動を覚えました。

また、今回のセミナーに参加した最大の目的は、現在、名古屋商科大学に在学する高橋一平君の講座が聞きたかったからです。彼は高校３年生のとき古代史関係の本に論文を発表していて以前から気になる存在でした。今回この論文とそれ以後の研究成果を報告しました。天皇の皇位継承の神宝とされる「三種の神器」は、実は「四種の神器」ではないかというものです。鏡、勾玉、剣ともう1つは何か、「比礼（ひれ）」という女性の装身具、矛に付ける小旗ではないかというのです。

ここからは私の考えですが、当然この「比礼」は弥生時代の宝物ならば絹製だと思われます。古田先生が最近の講演で話された中国絹の出土が北部九州の博多湾岸の王墓に集中していること考え合わせると、高橋君の言う「四種の神器」も実は九州王朝のもので近畿天皇家はそのうちの三種のみを王位継承の道具としたのではない

かと思うのです。いずれにしても古代史に若い人が興味を持ち大いに研究されることに拍手を送りたいと思いました。また、この講座に現役の高校生が沢山参加していたことも心強い限りでした。

７月例会報告

○　「始」と「初」

名古屋市　　竹口健三

６月２８日に行われた古賀達也氏の講演の中で、『日本書紀』には無量寺文書の記事を転用したのではないかと述べられた。その根拠として同じ記事が『日本書紀』で二度登場するといわれた。

これは、孝徳天皇白雉元年十月～二年三月條及び推古天皇十三年四月～十四年四月條の記事で、共通するのは「始造・・・・」ではじまるところです。

岩波文庫『日本書紀』では「始造・・・」を「はじめて造る」と読んでいます。古賀氏もそれを根拠に述べられたが、『漢語新辞典』によれば、「始（はじめる）」は動詞で、継続する事柄の出発点であって、「はじめて・・・をする」を表現するのは「初」であるので、この「始造・・・」は、「造り始める」と読むのではないかと述べた。

○　飛騨と両面宿儺

阿久比町　　竹内　強

飛騨と両面宿儺について、その導入の部分を報告した。

飛騨地方への導入経路が古代はどのようなルートを辿ったのか。延喜式によれば東山道から現在の岐阜市の東北部あたりから北に進路をとり飛騨川沿いに北上すると書かれている。この延喜式に書かれたのは平安初期のことであり、『続日本紀』の和銅６年に笠朝臣麻呂によって木曽路が開かれたとある。このことを前提に考えると、飛騨路もこれと前後して開かれたのではないか。

それでは、それ以前飛騨へのルートはどのようなものか。江戸中期、富山湾で水揚げされた鰤を飛騨を越え信州まで運んだ鰤街道が知られているが、この日本海沿岸の富山、福井などの北陸地方から南下するルートこそが古代の飛騨へのメインルートではないのか。

このことを明らかにすれることは、武振熊が両面宿儺を誅した仁徳紀の記事とそれにつながる伝承についてその成立に重大な疑問が浮かび上がる。両面宿儺についてはまったく相反する二つの伝承が残っている。ルート解明は宿儺伝説にとって重大なだけでなく飛騨の古代の歩みを解明する上で重要なポイントになると思っている。

8月例会に参加を

日　時：　８月９日（日）午後１時30分～５時
場　所：名古屋市市政資料館（第１集会室）
Tel:052-953-0051
名古屋市東区白壁１丁目３番地
参加料：５００円（会員無料）
交通機関
・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩８分
・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩５分
・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩５分
・　〃　「清水口」下車、南西徒歩８分
・　〃　「市役所」下車、東へ徒歩８分
駐車場
・名古屋市市政資料館：１２台収容(無料)
・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下駐車場：南隣、有料（３０分１７０円）
・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料（４０分２００円）

今後の予定

9月例会：9月13日（日）名古屋市市政資料館
10月例会：10月11日（日）名古屋市市政資料館
例会は原則として毎月第２日曜日です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配布される場合は、「１８部」ご用意願います。